

ミツカン水の文化交流フォーラム2007 開催のお知らせ

2107年の水文化

少人口・温暖社会という悲観シナリオを超える夢

写真は
2006年の
フォーラムと
交流会



温暖化の危機が叫ばれ、国内では人口減少が危惧されています。温暖化と少子化が同時進行する21世紀日本。そのとき、これまで慣れ親しんできた日本社会の水文化も大きく変わるかもしれません。

水分配のルール、都市の水利用、市場と水資源、水害対策等々、これら水とのかかわり方が生んできた水文化は、100年後に向けて、どのようなシナリオをたどるのでしょうか。「合理的予測」ではなく、「文化をつくる」視点から、日本の水文化の将来の夢を考えるポイントを議論していただきます。

2007年10月31日(水)

フォーラム：13:00～17:30(予定)

交流会：17:40～19:00(予定)

会場：東京ウィメンズプラザ

東京都渋谷区神宮前5 53 67

村上陽一郎(国際基督教大学大学院教授)

江守正多(国立環境研究所地球環境研究センター温暖化リスク評価研究室長)

鬼頭 宏(上智大学経済学部教授)

小長谷有紀(国立民族学博物館教授)

沖 大幹(東京大学生産技術研究所教授)

(敬称略)

なおプログラム等予告なく変更する場合がございます。
予めご了承ください。



鬼頭 宏
歴史人口学
経済史



江守正多
気候モデリング
地球温暖化の将来予測



沖 大幹
地球水循環システム
水資源アセスメント



小長谷有紀
文化人類学
文化地理学



村上陽一郎
科学史
科学哲学

<特別報告>

江守正多 地球シミュレーターが描く将来の水環境 このまま温暖化が進むとどうなるか

鬼頭 宏 日本の人口・経済社会と気候変動 どんな選択があるか

小長谷有紀 市場経済を超えることはできるか モンゴルの事例から

<特別講演>

村上陽一郎 地球環境問題と水文化 不確実な科学予測を社会は受容できるのか

<パネルディスカッション>

2107年 日本の水文化の夢をかなえる10のポイント

パネリスト：村上陽一郎、江守正多、鬼頭 宏、小長谷有紀 コーディネーター：沖 大幹

■水の文化27号予告

特集「水の生活意識調査12年」(仮)

1995年から開始して
毎年実施してきた「水の生活意識調査」。
12年間のデータ蓄積は、
どんな生活文化の水を
語ってくれるでしょうか。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。
すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク 夏の登壇者

当センターホームページ・水の文化人ネットワークコーナー。
以下の方々を順次アップロードする予定です。

江守正多 国立環境研究所地球環境研究センター温暖化リスク評価研究室長
小長谷有紀 国立民族学博物館教授
広井良典 千葉大学法経学部教授

編集後記

◆ 100年後がどのような世界なのか、さまざまな予測結果が出ているが、数字の結果だけでは納得性がない。人々がどのように考えて、どのように行動するのか、それが分析する上での大事な変数のような気がする。期待を込めて、せめて幸福なシナリオを描きたいものだ。(新)

◆ 100年後は無理だが、50年後には、まだ生きているかもしれない。そう思うと今号で取り上げた問題は、他人事ではない。明るい未来の実現へ向け、いま行動することが、特に私たちの世代には求められていると思う。(百)

◆ 100年後の子供や孫のためにとよく言われるが、とりあえず出産予定はないし、リアリティがない。輪廻転生を信じるなら、そこは素敵な地球であってほしい。まず一歩が大事なんだと思ってもなかなかできない。携帯電話は手放せないし、飛行機だって乗らないわけにはいかない。いやむしろ好きだったりする。矛盾を抱えながらそれでも一歩を踏み出さなければいけないと改めて思った。(ゆ)

◆ 大阪万博で夢見た未来社会に、小学生の私は無限の可能性を感じた。社会に出た頃は、東京がいずれ金融の中心地「世界都市」になると思っていた。その私がいま過去の歴史に未来を重ねている。お手本の無い時代はおもしろい。(中)

◆ 未来をバラ色にするために、今できることから始めなくては。と、さっそく「携帯電話」や「バイオマス」などを題材に友人たちと酒場で「エコ談義」を始めたら、盛りあがりすぎて、環境を破壊してしまいました。(恵)

◆ 梅雨に入ってからばったりと雨が降らなくなった。昔は早く明けてほしいと望んだものだったが、最近ではごく身近な人から雨が降ってほしいという声を耳にする。少なからず個々の意識が変化しているのを感じた。(力)

◆ 今、享受している快適性は、環境にハイインパクトであることで維持されている。それを科学技術の力でローインパクトにする努力も必要だが、むしろ、多少の不便を楽しんで工夫する生活こそ、豊かな快適性があることに気づくことが肝心なのではないだろうか。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第26号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁断転載複製

発行日 2007年(平成19年)7月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 秋山道雄 新美敏之 百瀬友美 小林夕夏 辻美代子
中庭光彦 緒方大輔 浅野恵子 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104 0033 東京都中央区新川1 22 15 茅場町中整ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 社会・文化活動センター内
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局
〒104 0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506